

貼りなおせばすんでしまふにかわの優劣についても即断は禁物。修理の事を考えると、接着したが最後、絶対に剥がれない糊は困ります」

古い優れた楽器に高い値段がつくのは、それが優れた設計のもとに、吟味された材料を用いて美術的にも非のうちどころのない完成度で仕上げられ、長い時間を経た後でも性能に何の減衰もなく、美術品としても最高級の形で残った、という稀少価値があるからだ。忘れてならないのは「古いことは古いが楽器としては価値のないもの」の方がずっと多い事である。古い、というだけでは億単位の値段は望むべくもない。一台のヴァイオリンを手作りで仕上げるには、約二百時間の工程が必要である。ラング氏の年間生産台数は三台から四台との事。愛情込めてつくられたこの二十世紀の楽器、二十世紀あたりにはどのぐらいの値段で売買されるのだろうか。クラシック音楽はあいかかわらず演奏されているだろうか。

ギター

世界を股にかけて活躍中のギタリスト、山下和仁^{かずひと}氏のソロリサイタルが一九八八年一月二十二日、ムジックフェラインの大ホールで催された。当夜の会場は満員札止めの盛況だった。「ギター一本でドボルザークの交響曲『新世界より』を全楽章弾いてしまふ」という山下氏のプログラムが、大変な前評判となったからである。

ギターが表現する音色や表現力の幅は、一般に想像されるよりもずっと広い。しかしそれらを最大限に活用するには、奏法の面から見てもまだまだ未開発な部分が多い。ギタリストがギターのために書かれた作品をギター本来の音色で弾くことに飽き足らず、未知の世界に挑む山下氏の試みは、まだ誰も踏み入った事の

ない世界の探求である。

さてこの楽器、発祥の歴史は古いが、ギターのギターたる位置が確立されたのは十七世紀のことであった。それまではリュートという、弦をはじいて演奏する楽器が全盛を誇っていたが、リュートのための芸術がいれば「完成されて」しまった後、ギターが「新しい可能性を秘めた楽器」として注目されたのである。今日に名の残る、また現在でも活躍中のギターの大家の多くはスペイン系だが、その昔にはフランスで愛された楽器だった。

それ程一般に浸透したにもかかわらず、演奏テクニクそのものに他の楽器、たとえばチェロの場合に見受けられるような際立った発展はなかったようである。管楽器やピアノのように楽器そのものが発達したという様子もない。「近代ギター奏法」とでもいう名称で総括されるメソッドも存在するが、教える先生によって細部のニュアンスがかなり異なる、というのが一般教育現場の現状のようである。

来壇四回目の山下氏から聞いた話をもとに、ここで少し楽器の紹介をしておこう。

ギターには通常六本の弦が張ってある。この弦、ギターに限った事ではないが、以前は「ガット弦」と呼ばれる小羊の腸から作られたものが主流であった。今日ではそれらに代わってナイロン製のものが一般的になっている。素人のつまびきならば切れるまで使えるナイロン弦も、山下氏のような本格派プロの演奏に使用されるとたちまち限界がきてしまい、音がさえなくなる。楽器に新しい弦を張ると、その弦が張力によって伸びるが、この伸びが落ちて着いて楽器に馴染むまでに約二時間、その後四〜五時間連続して使用すると、それでお払い箱になってしまうのだそうだ。ナイロン弦自体は特に高価なものではないが、一回に六本ずつ「おしゃか」になってしまいう上、交換用の新品の弦がいつもそのまま使用可能な精選された製品とは限らないため「良い弦をストックしておく」事はギタリストにとっては結構頭の痛い問題であるらしい。

もたないといえ、楽器自体もあまり耐久性のあるものではない。専門家の使用に耐え得るのはほぼ数年である。プレーヤーによってはたった一年で楽器を消耗してしまふ人もいる。ヴァイオリンなどと異なつてこのように限られた寿命を持つ楽器であるため、たとえ歴史的な古楽器を手に入れたとしても、そこには骨董価値以外あまり得るところはなさそうだ。楽器の大きさや形状も時代によって変化しており、それぞれの楽器に適応した演奏テクニックが要求される。

毎日練習していると、使用中の楽器それぞれに「本日の限界量」が感じられるそうである。「どうなると限界であるか」という点は微妙で言葉では表現できないが、端的には「音が艶を失う」のだそうだ。そこで楽器を休ませれば翌日には復活しているが、回復しなくなった時が「楽器の寿命が来た」時でもある。長時間練習したい時にはかたわらに何本かギターを用意しておき、次から次へと交換していく。しかし演奏旅行、特に飛行機に乗って海外に出かける時などそう何台もの楽器を持ち歩くわけにもいかず、日々の練習量に不満が残るのが山下氏の悩みであるように見受けられた。

ギターはそう高価な楽器ではない。アマチュア用には数万円で手にはいる楽器も多い。プロ用の楽器は一本数十万円から数百万円までだそうである。ちなみに山下氏の楽器はラミレスというスペインのメーカーの特製品で六十万円。特定のヴァイオリンやチェロにつくような数千万円、ましてや数億円などというとてもない価格は、ギターの世界には存在しない。

演奏は左手でフレットを押さえ右手で弦をかき鳴らすのだが、この際右手の指は五本とも演奏に使用される。指先の肉の部分で弦をはじく奏法と並行して、爪ではじく奏法も、なくてはならないテクニックである。そのために使用される「ピック」というプラスチック製のつけ爪もあるが、自前の生爪を使う方がより繊細な演奏が可能となる。正しいテクニックを用いて演奏していれば爪が割れるような故障は普通起きないそう

だが、いっばしの男が五本の指の爪を——それも右手だけ——伸ばし、大切にかばっている、という姿も、事情を知らない人間の目にはさぞ奇妙にうつる事だろう。

ヒズ・マスターズ・ヴォイス

昔の伝説の中に「車と共に来たりて車と共に去り、車には何の役にも立たぬが、さりとしてそれ無しには車が動けぬものは？」という謎があるが、その答えは「音」である。「あらゆる騒音の中で最も不快でないのが音楽だ」とは、十八世紀のイギリスの詩人サミュエル・ジョンソンの言葉である。

「音」はつい一世紀ほど前まで、それがどのようなものであってもただ消え去るだけが運命の、はかない存在であった。音楽が「瞬間芸術」と呼ばれるゆえんである。

音が気体や液体などを媒介として伝わる圧力の波である、という事からトーマス・エジソンは、この波を何か保存可能な物体に転写して残すことはできないだろうか、と考えた。その結果エジソンが考案した「蓄音器」とは、ごく簡単な構造のものであった。子供が作って遊ぶ糸電話の応用だが、振動膜には糸のかわりに金属製の針が取りつけられ、先端が円筒に巻かれた錫の箔に触れるようになっていた。この円筒をまわしていくと針によって音の振動が波型の溝として箔の上に残される。次にその溝に針を当てながら円筒をまわすと、先程記録した音が再生される。

この機械によって一八七七年、史上初めての録音が行なわれたが、音源はエジソン自ら歌う「メリーさんの羊」だった。雑音のまざった、歌自体はやっと聞き取れるようなしろものではあったが、これを境に蓄音器は「十九世紀の奇跡」として大変な反響を呼んだ。